地下鉄サリン事件被害者とその御遺族

福井 響さんの手記

2023年

以前、国内の教団施設を外から見る機会がありました。驚いたことに、老若男女20人くらいでしょうか、たくさんの監視カメラがついた玄関のインターホンを鳴らし次々と入っていきます。赤いランドセルを背負った小学校低学年の女の子が、両親と思わしき車から降りたち施設に入る光景に目を疑いました。また、大学生くらいの男女や社会人になりたてなのか初々しい感じの20代や30代の姿も。まんべんなく様々な世代、格好の人が吸い込まれていく中、90歳前後の高齢のご夫婦がお互いを支えながら入っていきました。本当に幅広い人たちが入信していて、かつて、アレフやひかりの輪、山田らの集団等の前身であるオウム真理教が引き起こした凶悪事件について、どれくらいの人びとが知っているのか不安になります。

公安調査庁によると、立入検査で施設に入る際、インターホンを鳴らしてから中に入れるまで相当長い時間を要し、検査妨害もあると聞きました。

そこで私からの提案です。もし、やましいことや隠し事など一切無いのであれば、監視カメラを置くことなく、検査の際はすぐに施設内に案内し、正々堂々と中の様子を見せてもいいのではないでしょうか。24時間、365日、いつでも誰にでも開放する。そうすることで近隣住民や世間からも少しは理解が得られるのではないでしょうか。教団の本当のことを知らない私たちは不安でいっぱいです。私たちの不安を少しでも取り除く努力をしてもらえませんか。

（2023年1月13日記）

2021年

「事件は今も現在進行形！」

みなさん、二十歳のころは何をしていましたか。私が事件に遭ったのはその頃、大学2年生でした。その日はアルバイトの夜勤明けで地下鉄日比谷線神谷町駅のホームにいました。8時11 分発、東武動物公園行きの発車を待っていると、「爆発事件がありました！」、しばらくして「この駅で運休します！」とアナウンスが流れました。ホームにあった公衆電話にはすぐに長蛇の列ができ、トンネルに目をやると、後続電車のヘッドライト2つがこちらを照らしたまま停車していました。何とか家に帰りたい、そのうち動くだろうと、前方に歩いていると「次の霞ケ関駅まで移動します！」とさらにアナウンスが。私は「帰れる！」と思い、2両目に飛び乗りました。

地下鉄サリン事件被害者とその御遺族

福井 響さんの手記

電車が動き出すと、ホームに男性が倒れているのが見えました。まだ警察も消防も駅員も来ていない、どことなく異様な雰囲気のなか、電車はゆっくりとトンネルに入っていきました。隣の霞ケ関駅で千代田線に乗り継ぎ、代々木上原駅で小田急線に乗ったころ、呼吸が苦しくなり、視野の周りに黒いフチのようなものが出来る“視野狭さく”の症状が出始めました。縮瞳で光が目に入りにくくなり、当日は快晴にもかかわらず車内や車窓はセピア色。何とか家にたどり着くも症状は改善せず、タクシーで病院へ。医師に「サリン中毒」と診断され、解毒剤のPAMを点滴してもらい、1週間入院しました。

当時、家族は海外在住、一人心細い中、四国から親戚が駆けつけてくれ、ホッとしたのを覚えています。その後は、微熱や目のまぶしさの後遺症が残り、このあとどのような健康被害が出るか分からない不安の中を生きています。

あの事件を起こしたオウム真理教は、「Aleph（アレフ）」や「ひかりの輪」などに名前を変え、今もあなたのすぐそばにいます。同じ教団ですので事件の再来を完全に否定することは出来ないと思います。今も苦しい思いをしている人がたくさんいることを忘れないで下さい。二度と同じ過ちが起きないよう、一人ひとりが自分事として考えて頂けたら嬉しいです。

（2021年12月6日記）